

広島俳句倶楽部

令和元年十二月作品集

九里半越

佐保光俊

若狭小浜から京都（海産物を運ぶ道であつた『踏街道』の中には、琵琶湖西岸の今津まで出て、そこから舟を利用するルートもあつた。小浜から今津までの距離から名付けられた『九里半越』である。小浜から行くと、難所の水坂峠に差し掛かる手前に「杉山」という集落があり、江戸時代には関所や茶屋が置かれていたという。今は国道の下に数件の廃屋と礎石が残るのみである。

蕎麦の花分水嶺に日の差して

花すすき折りて九里半越をゆく

杉山は秋の川音あるばかり

草の繁水坂峠を流れけり

保坂へきちきちの道くだりけり

穂芒や真正面に琵琶の海

日はすでに伊吹にありて花芙蓉

秋晴の今津に鶯のひるがへる

竹生島より伊吹山の淡し萩の風

花木槿竹生島すつかり暮れにけり

ひよどりの声のしてゐる日向かな

ことさらに鶉の啼く日の天日てんびかな

梅檀の実は照り人は語りたる

いち日の終りの柿の甘さかな

冬の日の最初に差せる祠かな

冬菊の向うを人の来りけり

橋渡り子のゐなくなる石路の花

花八つ手すこし遠くを歩きたる

冬薔薇とんび激しく啼きにけり

枯蔭に雨の降り出し早きかな

寒禽の高く過れる夕間暮れ

宵星の輝き始む冬夕焼

幼子の頬を照らせり冬灯

夜神樂の大蛇の鱗輝けり

松落景微かに匂ふ小道かな

この先に陸軍墓地や龍の玉

池底の朽景巻き上げ鯉遊ぶ

枯野原真ん中川の流れたる

枯蘆に降り立つてゆく雀かな

冬鳥の過つてゆけり明けの空

着ぶくれて沖の巨船を見てゐたり

煌々とコンビナートや長き夜

寒いねと猫に言うたる朝かな

急坂を来てゐるらしき雪女

冬薔薇フオーク並べて席を取る

潮の引く岩間に海鼠捕りにけり

帰宅せし子の耳朶の冷たくて

行きつけの居酒屋休み雪催

香煙の流るる枝に帰り花

新しき筆にて年賀状を書く

佐保光俊

村上正人

あざみ

十一月駅の小さき灯のまぶし

小春日や抱けばすぐに子の位いて

冬初め新婦の父の弾き語り

冬の月ホットミルクをよく混ぜて

冬薔薇くれなるの線二三条

くしやくしやの顔で泣く子や冬林檎

甲高くインコの鳴ける十二月

横浜の公孫樹落葉の長き道

血管が手の甲に浮き時雨空

枯蔓の巻きついてゐる太き幹

四阿のそばに実をつけ山法師

錦川鉄道に見る紅葉かな

五つ六ついびつな榎植ころがりて

留守宅の門扉に柚子をぶら下げる

公孫樹黄葉くるくる舞うて散りにけり

風に乗り櫟黄葉の散りにけり

図書館の三階に見る棟の実

栴檀の実のこぼれたる美術館

水口に鯉の集まり石路の花

冬の夕川面を擦りて鶴の癸ちぬ

波止際の潮の深きを鑑来る

銀色の魚飛びけり初時雨

きはやかに枝線の伸び冬の晴れ

風の鉄路を越えて路地を抜け

麦を蔭く照り翳りして一日かな

冬紅葉磐座までの七曲り

高枝に群れて中州に冬の鳥

虎落笛川の向かうに灯の点り

山と積む泥つき大根猫車

膨れたる半平押へおでん鍋

亜矢

敬子

暁子

ゆく道の右も左も檸檬生る

カーテンを開くたび見る紅葉かな

冬近き窓辺に本を読みるたり

高枝の鶉の声よくとほる

初冬の植ゑ替へられし董かな

何ごともなくて見上ぐる冬の空

冬天の高きに鳥の来る日かな

積もりたる落葉を踏んで帰りけり

藪蘭の實の残りたる冬の庭

ひとしきり山鳩の鳴く枯野かな

黄葉せる公孫樹の奥に母校あり

蓮の実に不動明王彫りあがる

茸狩まだ小さきは枯葉かけ

風邪の母に急ぎ朝餉を用意せり

マスクして母の見回る畑かな

間引菜を二本の指で抜きにけり

焼藪を風呂の焚口より出せり

母となり神樂の笛を聞いてをり

本堂へ母の手を引き報恩講

冬の星今宵は母と床並べ

綾取の紐編む母の手の早し

冬紅葉一葉残りて揺れてをり

冬の月見つ寝床に入りたる

季語集をめくる音させ冬の朝

一本の樵の木のある枯野かな

ポケットに両手突つ込み落葉踏む

飛び跳ねて枯葉を踏める幼かな

ふるさどに集ひて鴨を食らひけり

煮凝や小骨一本づつ取りて

踏み台にポインセチアの置かれたる

高尾ひとみ

ちどり

松本恵和

早朝の刈田に湯氣の立つてをり
残る菊はのかな香りしてをりぬ
半月のみるみる海に落ちにけり
見上げたる公孫樹黄葉の先に雲
老木の桜紅葉の揺れにけり
紅葉して赤子の上に散りにけり
初冬の海をしばらく見てゐたり
対岸の端から冬日差してゆく
山茶花の垣根をまがり人の来る
プランター水仙の芽の覗きたる

美耶

大学の公孫樹落葉を踏みゆけり
一人住む媼の家の木守柿
川風に吹かれ柳の落葉かな
リヤカーに積んで運びし桔芙蓉
子どもらの落葉踏む音さくさくと

阿姫

どんぐりの続けて落つる昼下り
枯すすき向うに見ゆる被服廠
鸛色に染まる端山や冬に入り
高齢者講習を終へ小六月
金網の上に並びて寒雀

井藤希

二階より灯りの洩るる柿簾

筆文字に酔ひ熱燗に酔ひにけり

枇杷咲いて路地に響ける靴の音

深々と路地に差したる冬日かな

凍雲に響き列車の過ぐる音

郷関の流れに映る山紅葉

滔々と滝の流るる紅葉かな

秋の宵嫁と重ねる祝ひ酒

落葉敷く山の国道走りたる

初日の出ビルの間に眺めけり

枯菊をすこし残して切りにけり

玄関に飾っておきぬ柿落葉

来客に庫裏のストーブ寄せにけり

来客の滑みし門前大根干す

もろもろの家事を終へたる師走かな

大橋博子

大畑恵

紀英子

枯葺が煉瓦倉庫を覆ひたる

白鳥のうなづの字にしなりをり

冬鷗相生橋を越えにけり

まだ残るタオルの湿り花八つ手

別荘の木戸の閉ざされ山眠る

熊谷ゆり子

匂して雨の降りだす鶏頭花

足早に寺町を行き花芙蓉

母と行く公園通り公孫樹散り

嚴島鹿に時雨の来てをりぬ

冬柏夕方に雨止みにけり

大門に仏旗の揚がり雪催

桑門わかこ

枝の光桜紅葉の垂れて揺れ

富有柿大きひとつを買ひにけり

満月や庭に映りて竿の影

洗ひたる間引菜ドアに吊つてあり

一瞬に内灘雪に消えにけり

新庄憲彦

石垣にふれて咲きたる石路の花

牡蠣船の明りの映る被爆川

ぐらぐらと湯豆腐をどる鍋の中

餅を搗く杵の音する隣かな

搗き立ての餅の隣へられ回覧板

友岡崇山子

老木の幹を巻きたる葛紅葉

牡蠣船の暁の橋くぐりたる

寒鴉高層ビルの上を飛ぶ

比治山は落葉の山となりけり

城跡の井戸覗きをり冬帽子

松田裕子

水鳥の四五羽が川に来てゐたる

日あたりて高架の下の浮寝鳥

水鳥の色鮮やかに羽ばたけり

水鳥に声をかけたる少女かな

浮寝鳥双眼鏡で見てゐたり

みさ子

紅葉の大山に日のあたりけり

冬に入り大荒波の日本海

石垣の向うに蜜柑実りたる

石路の花団どて久しき茶店かな

山中の枯木を渡り鴉鳴く

駅員の指呼に揺れをり赤い羽根

枯芝にフリスビー追ふ子犬かな

山茶花の散り敷く宿に泊りけり

初風の朝日に向かふ定期船

注連飾庭の橙使ひたる

鯛焼の焼きたてを買い母と食ふ

それぞれにマフラー巻いて下校かな

冬の海釣り糸手繰る漁師かな

阿波久

宮田保江

森口良樹

冬霧の中に墨絵のごとき山

初雪の日に参りたる薬師堂

寒菊を供へて父と語りけり

遠藤さつき

神の島廬のゆつくり歩くなり

店先に冬の商品並びたる

冬の朝窓を曇らせ車くる

かこ

コート着て雑踏のなか歩きたる

しんしんとしんしんとして山眠る

橋杭の周りで鴨が波を立て

民

冬の虹見たかと電話かかりたる

石路の花散歩の人とまた出会ふ

年の内用事の残る日の多し

ちかこ

浮寝鳥ぶつかるときに飛び上がり

纖月と星の輝く冬茜

実に結ぶ鈴の鳴りけりクリスマス

穂高

それぞれに水鳥群れたり離れたり

川岸に続いてゐたる枯すすき

枯草も混じりて届く野菜かな

幹

一列に水鳥川で漁りをり

かこつけて故郷に行く師走かな

冬うらら猫の歩ける塀の上

やす保

田の端のたわわの柿の熟れて落つ

落葉して風の定まる朝かな

英一

水鳥の戻りて来たときは五羽

子供部屋床に脱がれしちゃんちゃんこ

ふじ女